

# 開扉一妖帖

泉鏡花

青空文庫



ただ仰向けあおむに倒れなかつたばかりだったそうである、松村信也しんや氏——こう真面目まじめに名のつたのでは、この話の模様だと、御当人少々きま極りが悪いかも知れない。信也氏は東——新聞、学芸部の記者である。

何しろ……胸さきの苦しさに、ほとんど前後を忘じたが、あとで注意すると、環海ビルディング——帯暗白堊はくあ、五階建の、ちやうど、昇つて三階目、空に聳そびえた滑かに巨大なる巖いわおを、みしと切組んだよう、芬ぶんと湿りを帯びた階段を、その上へなお攀よじ上ろうとする廊下であつた。いうまでもないが、このビルディングを、礎いしずえから貫いた階子はしごの、さながら只中ただなかに当つていた。

浅草寺觀世音の仁王門、芝の三門など、あの真中まんなかを正面に切つて通ると、怪異がある、魔が魅さすと、言伝える。偶然だけけれども、信也氏の場合は、重ねていうが、ビルジングの中心にぶつかった。

また、それでなければ、行路病者のごとく、こんな壁際に踞しゃがみもしまい。……動悸どうきに波を打たし、ぐたりと手をつきそうになつた時は、二河白道にがびやくどうのそれではないが——石段は幻に白く浮いた、まんじ卍の馬の、片かたあぶみ 燈とうをはずして倒さかさまに落ちそうにさえ思われた。

いや、どうもちつと大袈裟おおげさだ。信也氏が作者に話したのを直接に聞いた時は、そんなにも思わなかった。が、ここに書きとると

何だか誇張したもののように聞こえてよくない。もつとも読者諸賢に対して、作者は謹んで真面目である。処を、信也氏は実は酔っていた。

宵から、銀座裏の、腰掛ではあるが、生灘きなだをはかる、料理が安くて、庖丁の利く、小皿盛の店で、十二三人、気の置けない会合があつて、狭い卓テエブル子を囲んだから、端から端へ杯が歌留多かるたのようにはずむむにつけ、店の亭主が向むこう願はちまき巻まきで気競きそうから菊正宗の酔えいが一層はげ烈れつしい。

——松村さん、木戸まで急用——

いけ年としつかまつを仕つかまつつた、学芸記者が馴なれない軽口けいこうの逃にげ口くち上で、帽子ぼうしを引ひ浚さらうと、すつとは出られぬ、ぎつしり詰合ひっさりつて飲んでいる、

めいめいが席を開き、座を立つて退のきぐち口を譲つて通した。――

「さ、出よう、遅い遅い。」悪くすると、同伴つれに催促されるまで酔よ潰つぶれかねないのが、うろ抜けになつて出たのである。どうかしてゐるぜ、憑つきものがしたようだ、怪我けがをしはしないか、と深切なのは、うしろを通して立つたまま見送つたそうである。

が、開き直つて、今晚は、環海ビルジングにおいて、そんじよその辺の芸げいしや妓連中、音曲のおさらいこれあり、頼まれました義理かたがた、ちよいと顔を見に参らねばなりません。思切つて、ぺろ兀はげの爺じいさんが、肥ふとつた若い妓こにしなだれたのか、浅葱あさぎの襟をしめつけて、雪駄せったをちやつかせた若いものでないと、この口上は――しかも会費こそは安いが、いずれも一家をなし、一芸に、

携わる連中に——面と向つては言いかねる、こんな時に持出す親はなし、やけに女房が産気づいたと言えないこともないものを、臨機縦横の気働きのない学芸だから、中座の申訳に困り、熱爛あつかんに舌をやきつつ、飲む酒も、ぐツぐと咽喉のどへ支えさしていたのが、いちどきに、赫かつとなつて、その横路地から、七彩の電燈の火山のごとき銀座の木戸口へ飛出した。

たちまち群集の波に捲まかれると、大橋の橋杭はしぐいに打衝ぶつつかるような円タクに、

「——環海ビルジング」

「——もう、ここかい——いや、御苦労でした——」

おやおや、会場は近かった。土橋寄りだ、と思うが、あの華やかな銀座の裏を返して、黒幕を落したように、バツタリ寂しい。……大きな建物ばかり、四方に聳立した中にこの仄白いのが、四角に暗夜を抽いた、どの窓にも光は見えず、霧の曇りで陰々としている。——場所に間違いはなからう——大温習会、日本橋連中、と門柱に立掛けた、字のほかは真白な立看板を、白い電燈で照らしたのが、清く涼しいけれども、もの寂しい。四月の末だというのに、湿気を含んだ夜風が、さらさらと辻惑いに吹迷って、卯の花を乱すばかり、颯と、その看板の面を渡った。

扉を押すと、反動でドンと閉ったあとは、もの音もしない。正面に、エレベエタアの鉄筋が……それも、いま思うと、灰色の魔

の諸脚もろあしの真黒まっくろな筋のごとく、二ヶ処ほらあなに洞穴ほらあなをふんで、冷く、不気味つったに突立つたつていたのである。

——まさか、そんな事はあるまい、まだ十時だ——

が、こうした事に、もの馴なれない、学芸部りょうげんの了りょうげん簡かんでは、会場ばいじやうにさし向う、すぐ目前まへ、紅提灯べにぢようちんに景気幕けいきまくか、時節ときせつがら、藤ふじつつじ。百合なでしこ、撫子なでしこなどの造花ぞうかに、碧あおむらさき紫むらさきの電燈でんとうが燦さんぜん然ぜんと輝きらいて——いらつしやい——受附うけつけでも出張でばつている事、と心得違こころあはれちがひいをしていたので。

どうやら、これだと、見た処みよ、会かいが済すまんだあとのように思われ  
る。

——まさか、十時、まだ五分前だ——

立つていても、エレベエタアは水に沈んだようで動くとも見えないから、とにかく、左へ石梯子いしばしごを昇りはじめた。元来慌てもものせつかちの癖に、かねて心臓が弱くて、ものの一町と駆出すことが出来ない。かつて、彼の叔父に、ある芸人があつたが、六十七歳にして、若いものと一所に四国に遊んで、負けない気で、鉄てつかい柎かヶ峰へ押昇つて、煩つて、どつと寝た。

聞いてさえ恐れをなすのに——ここも一種の鉄柎ヶ峰である。あまつさえ、目に爽さわやかな、敷波の松、白しろたえ妙なぎさの渚どころか、一毛の青いものさえない。……草も木も影もない。まだ、それでも、一階、二階、はツはツ肩で息ながら上るうちには、芝居の棧敷さじきう裏らを折曲げて、縦つたに突立つたてたように——芸げい妓しゃの温習おさらいにして

見れば、——客の中なり、樂屋うちなり、裙模様を着けた草、  
 櫛くしさした木の葉の二枚三枚は、廊下へちらちらとこぼれて来よう。  
 心だのみの、それが仇あだで、人けがなさ過ぎると、虫も這はわぬ。  
 心は轟とどろく、脈みやくは鳴る、酒の酔えいを円タクに蒸えいされて、汗ばんだの  
 を、車を下りてから一度夜風にあたった。息もつかず、もうもう  
 と四面まわりの壁においの息を吸ひつて昇あるのが草いきれに包まれながら、性の  
 知れない、魔ものの胴どうなか中なかを、くり抜きに、うろついている心地  
 がするので、たださえ心臓の苦しいのが、悪酔はきけに嘔はき気がついた。  
 身みもた悶もえをすれば吐つきそうだから、引ひ返かえして階下したへ抜けるのさえ  
 むずかしい。

突俯つつぶして、（ただ仰向けあおむに倒れないばかり）であつた——

で、背くぐみに両膝を抱いて、動悸どうきを圧おさえ、潰つぶされた蜘蛛くものごとくビルジングの壁際に踞しゃがんだ処は、やすものの、探偵小説の挿さ画しえに似て、われながら、浅ましく、情なさけない。

「南無なむ、身延みのぶさま様——三百六十三段。南無身延様、三百六十四段、南無身延様、三百六十五段……」

もう一息で、頂上の境内という処だから、団扇うちわだいこ太鼓もだらりと下げて、音も立てず、千箇せんがじ寺参りの五十男が、口で石段の数取りをしながら、顔色も青く喘あえぎ喘あえぎ上るのを——下山の間際に視みたことがある。

思出す、あの……五十段ずつ七折ばかり、繫つないで掛け、雲かけはしの棧

に似た石段を——麓ふもとの旅籠屋はたごやで、かき玉の椀わんに、きざみ昆布いそひのつくだ煮か、それはいい、あろう事か、朝酒あさを煽あおりつけた勢いきおいで、通しの夜汽車で、疲れたのを顧みず——時も八月、極暑に、矢声を掛けて駆昇くわせいつた事がある。……

呼吸いきが切れ、目が眩くらむと、あたかも三つ目と想う段の継目の、わずかに身を容いるるばかりの石の上へ仰ぎ倒れた。胸は上の段、およそ百ばかりに高く波を打ち、足は下の段、およそ百ばかりに震えて重い。いまにも胴中から裂けそうじょうだんで、串しゅうだん戯ごどころか、その時は、合掌ごうじょうに胸を緊しめて、真ま蒼さおになつて、日ひ盛さかりみみずの蚯蚓みみずでのびた。叔父の鉄柎てつぽヶ峰みねではない。身延山の石段の真ま中なかで目を瞑つぶろうとしたのである。

上へも、下へも、身動きが出来ない。一滴の露、水がなかつた。酒さえそのままねば、そもなるまい。故郷も家も、くるくると玉に廻つて、生命いのちの数珠じゆずが切れそうだった。が、三十分ばかり、静じつとしていて辛うじて起たつた。——もつともその折は同伴つれがあつて、力をつけ、介抱した。手を取つて助けるのに、繩すなつて這はうばかりにして、辛うじて頂上へ辿たどることが出来た。立たちどころ 処ところに、無熱池の水は、白き蓮華れんげとなつて、水盤みづいにふき溢あふれた。

——ああ、一口、水がほしい——

實際、信也氏は、身延山の石段で倒れたと同じ気がした、と云うのである。

何より心細いのは、つれがない。樹の影、草の影もない。囁ささみ

たいほどの雨氣あまけを帯びた辻の風も、そよとも通わぬ。

……その冷く快かった入口の、立看板の白く冴さえて寂しいのも、再び見る、露に濡れた一ひとむら叢の卯の花の水の葉しおりをすると思うのも、いまは谷底のように遠く、深い。ここに、突当りに切組んで、二段ばかり目に映る階段を望んで次第に上層を思うと、峰のごとく遥はるかに高い。

気が違わぬから、声を出して人は呼ばれず、たすけを、人を、水をあこがれ求むる、瞳ばかり睜みはつたが、すぐ、それさえも茫ぼうとなる。

その目に、ひらりと影が見えた。真向うに、矗ちくりつ立した壁面と、相接するその階段へ、上から、黒く落ちて、鳥影のように映った。

が、羽音はしないで、すぐその影に薄りと色が染まって、婦の裾になり、白い蝙蝠ほどの足袋が出て、踏んだ草履の緒が青い。翼に藍鼠の縞がある。大柄なこの怪しい鳥は、円鬣が黒かった。

目鼻立ちのぼらりとした、額のやや広く、鼻の隆いのが、……段の上からと、廊下からと、二ヶ処の電燈のせいか、その怪しい影を、やつぱり諸翼のごとく、両方の壁に映しながら、ふらりと来て、朦朧と映ったが、近づくと、こっちの息だか婦の肌の香だか、芬におつて酒臭い。

「酔ってますね、ほほほ。」

蓮葉に笑った、婦の方から。——これが挨拶らしい。が、私

が酔っています、か、お前さんは酔ってるね、だか分らない。

「やあ。」

と、渡りに船の譬喩たとえも恥かしい。水に縁の切れた糸瓜へちまが、物干の如露じよろへ伸上るように身を起して、

「——御連中ですか、お師匠……」

と言った。

薄手のお太鼓だけれども、今時珍らしい黒繻子くろじゆす豆絞りの帯が弛ゆるんで、一枚小袖もずりとした、はだかつた胸もとを、きちりと紫の結目むすびめで、西行法師——いや、大宅光国おおやけみつくにという背負しよいか方たをして、櫛かしであろう、手馴てなれて研ぎのかかった白木の細い……所作しよさく、稽古けいこの棒をついている。とりなりの乱れた容子ようすが、長ながな

刀たに使ったか、太刀か、刀か、舞台上で立廻りをして、引ひっこ込んで来たもののように見えた。

ところが、目皺めじわを寄せ、頬を刻んで、妙まぶに眩まぶしそうな顔をして、「おや、師匠とおいでなすったね、おとぼけでないよ。」

とのつけから、

「ちよいと旦那だんな、この敷石の道の工合ぐあいは、河岸じやありませんね、五十間。しゃつぽの旦那は、金やろかいじやあない……何だつけ……銭ぜにとるめんでしよう、その口から、お師匠さん、あれ、恥かしい。」

と片袖をわざと顔にあてて俯向うつむいた、襟が白い、が白粉おしろいまだらで。……

「……風体を、ごらんなさいよ。ピイと吹けば瞽女ごぜさあね。」  
と仰向けに目をぐつと瞑りつむ、口をひよつとこにゆがませると、  
所作の棒を杖つえにして、コトコトと床を鳴らし、めくら反ぞりに胸を  
反らした。

「按摩あんまかみしも三百もん——ひけ過ぎだよ。あいあい。」

あつと呆気あつけに取られていると、

「鉄棒かなぼうの音に目をさまし、」

じやらんとついて、ぱつちりと目を開いた。が、わが信也氏を  
熟じつと見ると、

「おや、先生じやありませんか、まあ、先生。」

「……………」

「それ……と、たしか松村さん。」

心当りはまるでない。

「松村です、松村は確かだけれど、あやふやな男ですがね、弱りました、弱ったとも弱りましたよ。いや、何とも。」

上脊があるから、下にしやがんだ男を、のぞ覗くように傾いて、

「どうなさいました、まあ。」

「何の事はありません。」

鉄柵ヶ峰では分るまい……

「身延山の石段で、行倒れになったようなんです。口も利けない始末ですがね、場所はどこです、どこにあります、あと何階あります、場所は、おさらいの会場は。」

「おさららい……おさらいなんかありませんわ。」

「ええ。」

ビルジングの三階から、ほうり出されたようである。

「しかし、師匠は。」

「あれさ、それだけはよして頂戴よ。ししよう……もようもない、ほほほ。こりや、これ、かみがたのくちあい口合や。」

と手の甲で唇をたたきながら、

「場末の……いまの、ルンならいいけど、足の生えた、ばんぺんさ。先生、それも、お前さん、いささかどうでしょう、ぷんと来た処をふり売りの途中、下の辻で、木戸かしら、入口の看板を見ましてね、あれさ、お前さん、ご存じだ……」

という。が、お前さんにはいよいよ分らぬ。

「鶏卵と、玉子と、字にかくとおんなじというめくらだけれど、おさらいの看板ぐらいは形でわかりますからね、叱られやしないと多寡たかをくくつて、ふらふらと入つて来ましたがね。おさらいや、おおさえや、そんなものは三番叟さんばそうだつて、どこにも、やつてやしませんのさ。」

「はあ。」

とばかり。

「お前さんも、おさらいにおいでなすつたという処で見ると、満ざら、私も間違えたんじやありませんね。ことによつたら、もう匆はねつちまつたんじやありませんか。」

さあ……

「成程、で、その連中でないとすると、弱つたなあ。……失礼だが、まるつきりお見それ申したがね。」

「ええ、ええ、ごもつとも、お目に掛かつたのは震災ずつと前でござんすもの。こつちは、商売、慾張よくばつてますから、両三度だけれど覚えていますわ。お分りにならない筈はず……」

と無雑作な中腰で、廊下に、斜ななめに向合つた。

「吉原の小浜屋（引手茶屋）が、焼出されたあと、仲なかのちよう之町をよして、浜はまちよう町で鳥料理をはじめました。それさ、お前さん、鶏卵と、玉子と同類の頃なんだよ。京千代さんの、鶴とぎさんと、一座で、お前さんおいでなすつた……」

「ああ、そう……」

夢のように思出した。つれだったという……京千代のお京さんは、もとその小浜屋に芸妓げいしやの娘分が三人あつた、一番の年若で、もうその時分は、鶴の細君であつた。鶴氏——画名は遠慮しよう、実の名は淳じゆん之助のすけである。

（——つい、今しがた銀座で一所に飲んでいた——）

この場合、うっかり口へ出そうなのを、ふと控えたのは、このおんなおんな婦が、見た処の容子だと、銀座へ押掛けようと言いかねまい。……

その腰掛では、現に、ならんで隣合つた。画会では権威だと聞く、厳いかめしい審査員でありながら、厚ぼつたたくなく、もの柔やわらかにす

らりとしたのが、小井のもずくの傍わきで、海を飛出し、銀に光る、  
鯉かつおの皮かわづくりで、静しずかに猪口ちよくを傾けながら、

「おや、もう帰る。」信也氏が早急に席を出た時、つまの蓼たを真ま  
青つさおに噛かんで立ったのがその画伯であつた。

「ああ、やっと、思出した……おつまさん。」

「市場の、さしみの……」  
と莞爾にっこりする。

「おさらいは構わないが、さ、さしあたって、水の算段はあるま  
いか、一口でもいいんだが。」

「おひや。暑そうね、お前さん、真赤まっかになつて。」

と、扇子おうぎを抜いて、風をくれつつ、

「私も暑い。赤いでしよう。」

「しんは青くなっているんだよ……息が切れて倒れそうでね。」

「おひや、ありますよ。」

「有りますか。」

「もう、二階ばかり上の高い処に、海老屋えびやの屋根の天水桶おけの雪の

遠見つてのがありました。」

「聞いても飛上りたいが、お妻さん、動悸どうきが激しくつて、動く

嘔えきそうだ。下へもおりられないんだよ。恩に被きるから、何とか

一杯。」

「おっしやるな。すぐに算段をしますから。まったく、いやに蒸

すことね。その癖、乾き切つてさ。」

とついと立つて、

「五月雨の……と心持でも濡れましょう。池の菰まこもに水まして、いずれが、あやめかきつばた 杜若、さだかにそれと、よし原に、ほど遠からぬ水神へ……」

扇子おうぎをつかつて、トントンと向うの段を、天井の巢へ、鳥のようひらりと行く。

一あめ、さつと聞くおもい、なりも、ふりも、うつちやつた容子うちの中に、争われぬ手練てだれが見えて、こつちは、吻ほっと息を吐ついた。

……

——踊が上手うまい、声もよし、三味線さみせんはおもて芸、下方したかたも、笛

まで出来る。しかるに芸人の自覚といった事が少しもない。顔だちも目についたが、色つぼく見えない処へ、媚なまめかしさなどは気けもなかつた。その頃、銀座さんと称となうる化粧問屋の大だいじん尽があつて、新あらたに、「仙牡丹せんぼたん」という白粉おしろいを製し、これが大当りに當つた、祝と披露を、枕まくらばし橋やおまつの八百松で催した事がある。

裾すそを曳ひいて帳場に起居たちいの女房の、婀娜あだにたおやかなのがそつく

りで、半四郎茶屋と呼ばれた引手茶屋の、大尽は常客だつたが、

芸妓げいしやは小浜屋の姉きようだい妹ひいきが一の鼻ひいき眞ま先まに取持まつつた。……当日は伺候しこうの芸者大勢がいずれも売出し

の白粉の銘、仙牡丹ちなに因ちなんだ趣向をした。幫ほうかん間かんなかまは、大尽

客を、獅子ししに擬なぞえ、黒牡丹と題して、金の角の縫いぐるみの牛に

なつて、大広間へ罷まかり出いで、馬には狐だから、牛に狸が乗った、滑稽おどけの果はては、縫ぐるみを崩すと、幫間同士が血のしたたるビフテキを捧げて出た、獅子の口へ、身を牲にえにして奉った、という生命いのちを賭とした、奉仕サアビスである。

（——同町内というではないが、信也氏は、住居すまいも近所で、鶴画伯とは別懇だから、時々その細君の京千代に、茶の間で煙草話に聞いている——）

小浜屋の芸妓姉妹は、その祝宴の八百松で、その京千代と、——中なかつの姉のお民たみ——（これは仲之町を圧して売れた、）——小股こまたの切れた、色白なのが居て、二人で、囃子はやしを揃えて、すなわち連れ

獅子んじしに骨身を絞ったというのに——上の姉のこのお妻はどうだろ  
う。興たけなわ酣なわなる汐しおどき時とき、まのよろしからざる処かかあへ、田舎かかあの媽か々の肩か  
たてぬぐい、手拭ひっぱしよで、引端折ひっぱしよりの蕎麦そばきり色くさかりかご、草刈くさかりかご籠かごのきりだめから、  
へぎ盆へぎに取つて、上客あがりからずらりと席順せきじゆんに配あつて歩行あるいて、「く  
いなせえましよう。」と野良声のらこゑを出したのを、何だともあ思いま  
す？

（——鶉うずの細君京千代のお京さんの茶の間話ちやのまなわに聞いたのだが——）  
つぶし餡あんの牡丹餅ぼたんもちさ。ために、浅あからざる御不興ごふきやうを蒙こうむつた、そ  
うだろう。新製しんせい売出うりだしの当り祝あがりいらいにつぶしは不可いけない。のみならず、

酒宴の半ばへ牡丹餅は可笑しい。が、すねたのでも、諷したので  
も何でもない、かのおんなの性格の自然に出でた趣向であつた。

……ここに、信也氏のために、きつけの水を汲むべく、屋根の  
雪の天水桶を志して、環海ビルジングを上りつつある、つぶし餡  
のお妻が、さてもその後、黄粉か、胡麻か、いろが出来て、日光  
へ駆落ちした。およそ、獅子大じんに牡丹餅をくわせた姉さんな  
るものの、生死のあい手を考えて御覧なさい。相撲か、役者か、  
渡世人か、いきな処で、こはだの鮓は、もう居ない。捻つた処で、  
かりん糖売か、皆違う。こちの人は、京町の交番に新任のお巡査  
さん——もつとも、角海老とかのお職が命まで打込んで、上り藤  
の金紋のついた手車で、楽屋入をさせたという、新派の立女形、

二枚目を兼ねた藤沢浅次郎に、よく肖にていたのださうである。

あいびきには無理が出来る。いかんせん世の習ならいである。いずれ

は身のつまりで、遁にげて心中の覚悟だった、が、華嚴けごんの滝へ飛込

んだり、並木の杉でぶら下ろうなどというのではない。女形おやま、二

枚目に似たりといえども、彰義隊しょうぎたいの落武者を父にして旗本の血

の流れ淙そうそう々たる巡査である。御先祖の霊前に近く、覚悟はよい

か、嬉しゆうござんす、お妻の胸元を刺貫き——洋サアベル刀か——は

てな、そこまでは聞いておかない——返す刀で、峨が々たる巖石いわおを

背そびらに、十文字の立ち腹を搔切かつきつて、大蘇たいそ芳年よしとしの筆の冴さえを見よ、

描く処の錦にしきえ絵のごとく、黒髪山の山裾に血を流そうとしたので

あった。が、仏法僧のなく音覚ねおぼつか束つかなし、誰に助けらるるともな

く、いのち生命生きて、浮世のうらを、古河銅山の書記かきやくになつて、二年ばかり、子まで出来たが、気の毒にも、山小屋、飯場のパパは、煩わづつてなくなつた。

お妻は石炭屑くずで黒くなり、枝炭のごとく、煤すすけた姑獲鳥うぶめのありさまで、おはぐろ溝どぶの暗夜やみに立ち、刎はね橋ばしをしよんぼりと、嬰あかん児ぼを抱かかいて小浜屋へ立帰る。……と、場所がよくない、そこらの口の悪いのが、日光がえりを、美術の淵源えんげんち地、莊嚴ずしの廚子から影向ようこうした、女菩薩にょぼさつとは心得ず、ただ雷の本場と心得、ごろごろさん、ごろさんと、以来かのおんなを渾名あだなした。——嬰児あかんが、二つ三つ、片口をきくようになると、可哀相かわいそうに、いっどこで覺えたか、ママを呼んで、ごよごよちやん、ごよごよちやま。

じつげつせいちゆうやのおりわけ  
○日月星昼夜織分——ごろからの夫婦喧嘩に、なぜ、かか  
さんをぶたしやんす、もうかんにんと、ごよごよごよ、と雷の児  
が泣いて留める、件の浄瑠璃だけは、一生の断ちものだ、と眉  
にも頬にも皺を寄せたが、のぞめば段もの端唄といわず、前垂  
掛けて、朗に、ほがらか、またしめやかに、唄って聞かせるお妻なのであつ  
た。

前垂掛——そう、髪もいぼじり巻同然で、紺の筒袖つつぽで台所を  
手伝いながら——そう、すなわち前に言った、浜町の鳥料理の頃、  
鶴氏に誘われて四五度出掛けた。お妻が、わが信也氏を知ったと  
いうはそこなのである。が、とりなりも右の通りで、ばあや、同

様、と遠慮をするのを、鶴画伯に取っては、外がいせき戚の姉だから、  
 座敷へ招じて盃さかずきをかわし、大分いけて、ほろりと酔うと、誘えば  
 唄いもし、促せば、立って踊った。家元がどうの、流儀がどうの、  
 合方の調子が、あのの、ものの、と七面倒に気取りはしない。口  
 三味線ざみせんで間にあって、そのまま動けば、筒袖つつぽも振袖で、かつい  
 だ割箸が、柳にしない、花に咲き、さす手の影は、じきその隅  
 田の雲に、時ほととぎす鳥とがないたのである。

それでは、おなじに、吉原を焼出されて、一所に浜町へ落汐おちしお  
 か、というと、そうでない。ママ、ごよごよは出たり引いたり、  
 ぐれたり、飲んだり、八方流転の、そして、その頃はまた落込み  
 ようが深くって、しばらく行方が知れなかった。ほども遠い、：

…奥沢の九品くほんぶつ仏へ、廓くるわの講こうじゅう中がおまいりをしたのが、あの  
 辺の露店の、ぼろ市で、着たのはくたびれた浴衣だが、白地の手て  
ぬぐい拭を吉原かぶりで、色の浅黒い、すつきり鼻たかの隆いのが、朱羅しゆ  
らう宇の長煙草ながぎせるで、片かたえくぼ罨たばこに煙草を吹かしながら田舎かかあの媽々と、  
ひつとき引解ひつときものの価ねの掛引かひきをしていたのを視みたと言う……その直後で  
 ある……浜町の鳥料理。

お妻おつまが……言いつた通り、気軽きけいに唄うたいもし、踊おどりもしたのに、一あ  
るよ夜、近所きんじよから時借りの、三味線さんまいせんの、爪弾つめびきで……

うし丑みつの、鐘かねもおとなき古寺こじに、ばけものどしがあつま  
 りア……

——おや、聞き馴なれぬ、と思う、うたの続きが糸に紛れた。——

きりようも、いろも、雪おんな……

ずどんと鳴って、壁が揺れた。雪見を喜ぶ都会人でも、あの屋根をすべ迂る、軒しずれの雪の音は、すさま凄じいのを知って驚く……春の雨だが、ざんざ降りしのびごまの、忍駒しごまだったから、かぶさつた雪の、その落ちる、雪のその音か、と吃驚びっくりしたが、隣の間から、小浜屋の主婦おかみが襖ふすまをドシンと打つたのが、古家だから、床の壁まで家鳴やなりをするまで響いたのである。

お妻が、糸の切れたように、黙った。そうしてうつむいた。

「——魔が魅すといえますから——」

一番鶏どりであろう……鶏どりの声が聞こえて、ぞつとした。——引手茶屋がはじめた鳥屋でないと、深更よふけに聞く、鶏の声の嬉しいものでないことに、読者のお察しは、どうかと思う。

時に、あの唄は、どんな化ものが出るのだろう。鶴氏も、のちにお京さん——細君に聞いた。と、忘れたと云って教えなかった。

「——まだ小どもだったんですもの——」

浜町の鳥屋は、すぐ潰つぶれた。小浜屋一家は、世田ヶ谷の奥へ引ひ込んで、唄どころか、おとずれもなかったのである。

(この話の中へも、関東ビルジングの廊下へも、もうすぐ、お妻

が、水を調べて降りて来よう。)

まだ少し石の段の続きがある。

——お妻とお民と京千代と、いずれも養女で、小浜屋の芸妓

三人の上に、おおあねえ、すなわち、主婦を、お来といった——

(その夜、隣から襖を叩いた人だが、)これに、伊作という弟が

ある。生まれからの廓くるわものといえども、見識があつて、役者の下

端たっぱだの、幫間ほうかんの真似まねはしない。書画をたしなみ骨董こつとうを捻ひねり、

俳諧を友として、内の控えの、千束の寮にかくれ住んだ。……小

遣万端いずれも本家持の処、小判小粒で仕送るほどの身上でない。

……両親はねばしがまだ達者で、爺じいさん、媪ばあさんがあつた、その媪さんが、

刎橋はねばしを渡り、露地を抜けて、食べものを運ぶ例で、門へは一廻

り面倒だと、裏の垣根から、「伊作、伊作」——店の都合で夜のふける事がある……「伊作、伊作」——いやしくも廓の寮の俳家である。卯の花のたえ間をここに音信おとずるるものは、江戸座、雪中庵の社中か、抱ほういつ一上人の三代目、少くとも蔵前の成美せいびの末葉でもあろうと思うと、違ちがう。……田畝たんぼに狐火が灯ともれた時分である。太郎いなり稻荷うからの眷属いたずらが悪戯いたずらをするのが、毎晩のようで、暗い垣から「伊作、伊作」「おい、お祖母ばあさん」くしやんと嚏くしやみをして消える。「畜生め、またうせた。」これに悩まされたためでもあるまい。夜あそびをはじめて、ぐれだして、使うわ、ねだるわ。勘当ではない自分で追出おんでて、やがて、おかち町辺したたに、もぐつて、かつて女たちの、玉章たまずさを、きみは今……などと認したためた覚えから、一時、

代書人をしていた。が、くらしに足りない。なくなれば、しやつ  
 ぽで、袴はかまで、はた、洋服で、小浜屋の店さして、揚幕ほどではあ  
 るまい、かみ手から、ぬつと来る。

（お京さんの茶の間話に聞くのである。）

鶉の細君の弱つたのは、爺さんが、おしきせ何本かで、へべつ  
 たあと、だるいだるい、うつむけに畳に伸びた蹠あしうらを踏ませられる。  
 ……ぴたぴたと行やるうちに、草くたび臥れるから、稽古けいこの時になまける  
 のに、催促をされない稽古棒を持出して、息いきづえ杖えにつくのだそう  
 で。……これで戻もどりかご駕籠かごでも思出すか、善玉の權かゐでも使えば殊勝  
 だけれども、疼いた痛て疼て痛て、「お京何をする。」……はずんで、脊骨  
 ……へ飛上る。浅草の玉たまのり乗のりに夢中だったのだそうである。もつ

とも、すべりと円い禿頭はげあたまの、護謨コム、護謨コムとしたのには、少なからず誘惑を感じたものだという。げええ。おおき大なおくび、——これに弱った——可厭いやだなあ、臭い、お爺さん、得えならぬにおい、というのは手製てづくりの塩辛で、この爺さん、彦兵衛さん、むかし料理番の入婿だから、ただ同然で、でつちあげ上る。「友さん腸はらわたをおいで行きねえ。」婆さんの方でない、安達ヶ原の納戸でないから、はらさごもりを割くのでない。松魚かつおだ、鯛だ。烏賊いかでも構わぬ。生な麦まむぎの鱻あじ、佳品である。

魚友うおともは意気な兄哥あにいで、お来さんが少し思召おぼしめしがあるほどの男だが、鳶とびのように魚の腹を握つかまねばならない。その腸わたを二升瓶に貯える、生葱なまねぎを刻んで捏こね、七色唐辛子を搔交かきまぜ、搔交かきまぜ、

片かた襷だすきで練上げた、東海の鯨こんげいをも吸寄すべき、恐るべき、  
 どろどろの膏こうやく薬の、おはぐる溝どぶへ、黄袋の唾をしたような異味  
 を、べろりべろり、と嘗なめては、ちびりと飲む。塩辛いきれの熟じ  
ゆくし柿の口で、「なむ、御先祖でええ」と茶の間で仏壇を拜むが  
 日課だ。お来さんが、通りがかりに、ツイとお位牌いはいをうしろ向け  
 にして行くゆ……とも知らず、とろんこで「御先祖でええ。」ど  
 ろりと寝て、お京や、蹠あしうらである。時しも、鬱うこん金木綿が薄よごれて、  
 しなびた包、おちへ来て一ひと霜しもくらった、大角豆ささげのようなのを嬉  
 しそうに開けて、一粒々々、根附だ、玉だ、緒おじめ《だと、  
 むかしから伝われば、道楽でためた秘蔵の小まものを並べて楽し  
 む処へ——それ、しも手から、しゃっぽで、袴はかまで、代書代言伊作

氏が縁台の端へあら頭あられるのを見ると、そりや、そりや矢藤さんがおいでになつたと、あわただ慌あしく鬱金木綿を臍へそでかくす……他なし、書画骨董の大方を、野分のごとく、この長男に吹さらわれて、わずかに瘦やせざや莢の豆ばかりここに残つた所以ゆえんである。矢藤は小浜屋の姓である。これで見ると、廓では、人を敬遠する時、我が子と呼ぶに、名を言わず、姓をもつてするらしい。……

矢藤老人——ああ、年を取つた伊作翁は、小浜屋が流転の前後——もともと世功を積んだ苦勞人で、万事じよさいのない処で、しようぎ将しやうぎ碁は素人の二段の腕を持ち、碁は實際初段うてた。それ等がたよりで、隠居仕事の寮番という処を、時流に乗つて、丸の内辺

の某倶楽部くらぶを預つて暮したが、震災のために、立寄つたその樹の蔭を失つて、のちに古女房と二人、京橋三十間堀裏のバラック建だての آپアトの小使、兼番人で佗わびしく住んだ。身辺の寒さ寂しさよ。……霜月末の風の夜よや……破蒲団やぶれぶとんの置炬燵おきこたつに、齒の抜けた頤あごを埋めうず、この奥に目あり霞かすめり。——徒いたすらに鼻たかが隆たかく目の窪くぼんだ処ところから、まだ娑婆しやば婆ば気きのある頃は、暖簾のれんにも看板にも（目あり）とかいて、煎餅せんべいを焼いて売りもした。「目あり煎餅」勝負事をするものの禁厭まじないになると、一時弘まつたものである。——その目をしよぼしよぼさして、長い顔をその炬燵に据えて、いとせめて親を思出す。千束の寮のやみの夜よ、おぼろの夜よ、そぼそぼとふる小雨の夜、狐の声もしみじみと可懐なつかしい折から、「伊作、伊作」

と女の音で、扉で呼ぶ。

「婆さんや、人が来た。」「うう、お爺さん」内職の、楊枝を辻  
占で巻いていた古女房が、怯えた顔で——「話に聞いた魔もの  
ではないかのう。」とおっかな吃驚で扉を開けると、やあ、化  
けて来た。いきなり、けらけらと笑ったのは大柄な女の、くずれ  
た円鬘の大年増、尻尾と下腹は何を巻いてかくしたか、縞小  
紋の糸が透いて、膝へ紅裏のにじんだ小袖を、ほとんど素膚  
に着たのが、馬ふんの燃える夜の陽炎、ふかふかと湯気の立つ、  
雁もどきと、蒟蒻の煮込のおでんの皿盛を白く吐く息とともに、  
ふうと吹き、四合壘を片手に提げて「ああ敷居が高い、敷  
居が高い、（鳥居さえ飛ぶ癖に）階子段で息が切れた。若旦那、

お久しゆう。てれかくしと、寒さ凌ぎしのに夜よなしおでんで引掛ひっかけて  
 来たけれど、お寒い。」と穴から渡すように、井をのせるとと  
 もに、その炬燵へ、緋ひの襦じゆ袢ばんむき出しの膝で、のめり込んだの  
 は、絶えて久しい、お妻さん。……

「——わかたなは、あんやたい——」若旦那は、ありがたいか、  
 暖かな、あの屋台か、五音ごいんが乱れ、もう、よいよい染みて呂律ろれつが  
 廻らぬ。その癖、若い時から、酒は一滴もいけないのが、おでん  
 で濃い茶に浮かれ出した。しよぼしよぼの若旦那。

さて、お妻が、流れも流れ、お落ちつこも落ちた、奥州青森の裏借  
 屋に、五もくの師匠をしていて、二十はたちも年下の、炭屋だか、炭焼  
 だかの息子と出来て、東京へ舞戻り、本所の隅っ子に長屋で居食

いをするうちに、この年齢としで、馬鹿々々しい、二人とも、とやに  
ついて、どつと寝た。青森の親元へ沙汰さたをする、手当薬療、息子  
の腰が立つと、手が切れた。むかいに來た親は、善知鳥うとう、うとう  
と、なきながら子をくわえてかえ皈ゆつて行く。片翼かたはになつて大道に倒  
れた裸の浜猫を、ぼての魚屋が拾つてくれ、いまは三河島辺で、  
そのばさら屋の阿媽おつかあだ、と煮こごりの、とけ出したような、み  
じめな身の上話を茶の伽ときにしながら——よぼよぼの若旦那が——  
さすがは江戸前でちつともめげない。「五もくの師匠は、かわい  
そうだ。お前は芸は出来るのだ。」「武芸十八般一通り。」と魚  
屋の阿媽だけ、太刀の魚うおほど反そつて云う。「義太夫は」「ようよ  
う久しぶりお出しなね。」と見た処、壁にかかったのは、  
蝙蝠こうもり

傘がさと箒ほうきばかり。お妻が手拍子、口ぐち三味線みせん。

若旦那がいい声で、

夢が、浮世か、うき世が夢か、夢ちよう里に住みながら、  
住めば住むなる世の中に、よしあしびきの大和路や、壺  
坂の片ほとり土佐町に、沢市という座頭あり。……  
妻のお里はすこやかに、夫の手助け賃仕事……

とやりはじめ、唄でお山へのぼる時分に、おでん屋へ、酒の継  
足しに出た、というが、二人とも炬燵の谷へ落込んで、朝まで寝  
た。——この挿話に用があるのは、翌朝かえりがけのお妻の態度  
である。りりしい眉毛を、とぼけた顔して、

「——少しばかり、若旦那。……あまりといえは、おんぼろで、

伺いたくても伺えなし、伺いたくて堪たまらないし、損料を借りて来  
ましたから、肌のものまで。……ちよつと、それにお恥かしいん  
だけど、電車賃……」

（お京さんから、つい去年の暮の事だといって、久しく中絶えた  
お妻のうわさを、最近に聞いていた。）

お妻が、段を下りて、廊下へ来た。と、いまの身なりも、損料  
か、借着らしい。

「さ、お待遠様。」

「難ありがた有い。」

「灰皿——灰落しらしいわね。……廊下に台のものツて寸法にい

かないし、遣手部屋やりてというのがないんだもの、湯呑みの工面がつきやしません。……いえね、いよいよとなれば、私は借着の寸法だけれど、花柳はなやぎの手拭てぬぐいの切立てのを持っていますから、ずつぷり平右衛門で、一時凌しのぎと思いましたが、いい塩梅あんばいにころがつていましたよ。大丈夫、ざあざあ洗って洗いぬいた上、もう私ひつが三杯ばかりお毒見が済んでいますから。ああ、そんなに引かぶひつつて、襟はもとが冷くありませんか、手拭をあげましょう。」

「一滴だってこぼすものかね、ああ助かった。——いや、この上欲しければ、今度は自分で歩行あるけそうです。——助かった。恩に被きますよ。」

「とんでもない、でも、まあ、嬉しい。」

「まったく活返った。」

「ではその元気で、上のおさらいへいらつしやるか。そこまで、おともをしてもよござんす。」

「で、演やつていますかね。三味線の音でも聞こえますか。」

「いいえ。」

「途中で、連中らしいのでも見ませんか。」

「人ツこ一人、……大びけ過ぎより、しんとして薄気味の悪いよう。」

「はてな、間ま違ちがいではなからうが、……何しろ、きみは、ちつともその方に引つかかりはないのでしたね。」

「ええ、私は風来ものの大気紛れさ、といううちにも、そうそう

中腰の膝へ、りようひじ両肱をついた、ほおづえ頬杖で。

「じかではなくつても——御別懇の鶴先生の、お京さんの姉分だから、ご存じだろうと思いますが……今、芝、あけふねちよう明舟町で、娘さんと二人で、お弟子を取っています、お師匠さん、……お民さんのね、……まあ、先生方がお聞きなすつては馬鹿々々しいかも知れませんが、……目を据える、いのち生命がけの事がありましたね、その事で、ちよつと、切ツつ、はツつもやりかねないといつた勢いきおいで、だらしがないけども、私がさ、この稽古棒（よっかけて壁にあり）を槍、やり鉄棒かなぼうで、あいて對手方へ出向いたんでござんすがね、——いりよう入費はお師匠さん持だから、乗込みは、ついその銀座の西裏

まで、円タクさ。

——呆れあきもしない、目めぎす敵かたきは、喫茶店、カフェーなんだから、めぐり合うも捜すもない、すぐ目めのまえ前にあら顕あらわれました。ところがさ、商売柄、ぴかぴかきらきらで、廓くるわの張店はりみせを硝子張がらすばりの、竜宮づくりで輝かそうていったのが、むかし六郷様の裏門へぶつかったほど、一棟、真まつくら暗くらじやありませんか。拍子う抜たけとも。……お前さん、近所で聞くとね、これが何と……いかに業ぎようていい体たいとは申せ、いたし方もこれあるべきを、裸で、小判、……いえさ、銀貨を、何とか、いうかどで……営業おさし留めなんだつて。……

出がけの意気組が意気組だから、それなり販かえるのも詰りません。

隙ひまはあるし、蕎麦屋そばやでも、鮎屋すしやでも氣に向いたら一口、こんな懐ふところところあい  
 中合あひも近来めつたにない事だし、ぶらぶら歩いて来ましたところ  
 が、——この前さ、お前さん、」

と低いが壁天井に、目を上げつつ、

「角海老に似ていましょう、時計台のあつた頃の、……ちよつと、  
 当世ビルジングの御前様に対して、こういつては相済まないけど  
 も。……熟じゅつと天頂てんぺんの方を見えていますとね、さあ、……五階かし  
 ら、屋の棟に近い窓に、女の姿が見えました。部屋着に、伊達巻  
 といった風で、いい、おいらんだ。……串じょうだん戯ごじゃない。今時  
 そんな間違あやまいがあるものか。それとも、おさらいの看板が見える  
 から、衣いしやう裳じょうをつけた踊子が涼んでいるのかも分らない、入つて

見ようと。」

「ああ、それで……」

「でござんさあね。さあ、上つても上つても。……私も可厭いやになつてしまひましてね。とんとんと裏階うらぼしご子を駆下りるほど、要害なに馴なれていませんから、うろろう気味で下りて来ると、はじめて、あなた、たつた一人。」

「だれか、人が。」

「それが、あなた、こつちが極きまりの悪いほど、雪のように白い、後姿でもつて、さつきのおいらんを、丸剥まるはぎにしたようなのが、廊下にぼんやりと、少し遠見に……おや！ おさらいのあとで、お湯に入る……ッてこれが、あまりないことさ。おまけに高尾の

うまれ土地だところで、野州塩原の温泉じゃないけども、段々の谷底に風呂場でもあるのかしら。ぼんやりと見てる間に、扉だか部屋だかへ消えてしまいましたかね。」

「どこのです。」

「ここの。」

「ええ。」

「それとも隣室となりだったかしら。何しろ、私も見た時はぼんやりしてさ、だから、下に居なすった、お前さんの姿が、その女が脱いで置いた衣きものぐらいの場所にありましてね。」

信也氏は思わず内端うちわに袖を払った。

「見た時は、もつとも、気もぼつとしましたから。今思うと、――

—ぞっこん、これが、目にしみついていきますから、私が背負しよつて  
いる……雪おんな……」

(や、浜町の夜更よふけの雨に——

……雪おんな……

唄いさして、ふと消えた。……)

「?……雪おんな。」

「ここに背負ほんつておりますわ。それに実ほんに、見事な絵でござんす  
わ。」

と、肩ななめに斜ななめなその紫包ななめを、胸でといた端もきれいに、片手で捧  
げた肱ひじに靡なびいて、衣紋えもんも褙つまも整然きちんとした。

「絵ですか、……誰の絵なんです。」

「あら、御存じない？……あなた、鶴先生のじやありませんか。」  
「ええ、鶴君が、いつね、その絵を。」

（いままだ、銀座裏で飲んでいよう、すました顔して、すすくと銚子ちょうしの数を並べて。）

「つい近頃だと言いますよ。それも、わけがありましたね、私が今夜、——その酒場へ、槍、鉄棒で押掛けたといいました。やっぱりその事でおかきなすったんだけれどもね。まあ、お目にかけますわ……お待なさい。ここは、廊下で、途中だし、下へ出た処で、往来と……ああ、ちよつとこの部屋へ入りましようか。」

「名札はかかっているいけないけれど、いいかな。」

「あき店だなさ、お前さん、田畝たんぼの葦簾よしず張はりだ。」

と云つた。

「ぬしがあつても、夜の旅じゃ、休むものに極きまつていますよ。」  
「しかし、なかに、どんなものか置いてでもあると、それだよね。」

「御本尊のいらつしやる、堂、祠ほこらへだつて入りましょう。……人間同士、構やしません。いえ、そこどころじゃあない、私は野宿をしましてね、変だとも、おかしいとも、何とも言いようのない、ほほほ、男の何を飾つた処へ、のたれ込んだ事がありますわ。野中のお堂さ、お前さん。……それから見りや、——おや開かない、鍵かかが掛つていますかね、この扉は。」  
「無論だろうね。」

「お圧してみて下さい。開きませんか？ ああ、そうね、あなたがなすつては御身分がら……お待ちなさいよ、おつな呪まじない禁ないがありませんから。」

ふところがみ 懐紙を器用に裂くと、端ひねを捻り、頭つまを抓んで、

「てるてる坊さん、ほほほ。」

すぼけた小鮓こだこが、扉の鍵穴に、指で踊った。

「いけないね、坊さん一人じゃあ足りないかね。そら、もう一人、出ました。また一人、もう一人。これじゃ長屋の井戸替だ。あかないかね。そんな筈はないんだけど、——雨をお天気にする力があるなら、掛けた鍵なぞわけなしじゃあないか。しつかりおしよ。」

ほんと、丸めた紙の頭を順にたたくと、手だか足だか、ふらふらふらと芴はねる拍子に、何だか、けばだった処が口に見えて、尖とがつて、目皺めじわで笑つて、揃つて騒ぐ。

「いえね、お前さん出来るわけがありますの。……その野宿で倒れた時さ——当にして行つた仙台の人が、青森へ住替えたというので、取りつく島からまた流れて、なけなしの汽車のお代。盛岡とかいう処で、ふつと気がつくつと、紙入がない、切符がなし。まさか、風体を視みたつて箱仕事もしますまい。間抜けで落したと気がつくつと、鉄道へ申し訳がありません。どうせ、恐入るものをさ、あとで気がつけば青森へ着いてからでも御沙汰おさたは同じだものを、ちつとでも里数の少い方がお詫わびがしいだらうでもつて、馬鹿さ

が堪たまらない。お前さん、あたふた、次の駅で下りましたがね。あ  
わてついでに改札口だか、何だか、ふらふらと出ますとね、停車  
場も汽車も居なくなつて、町でしょう、もう日が、とつぷり暮れ  
ている。夜道の落人、ありがたい、網の目を抜けたと思ひました  
が、さあ、それでも追手が掛かりそうかで、恐い事——つかまつたつ  
て、それだけものを、大した御法でも背いたようかでね。ええ、  
だもんだから、腹がすけば、ぼろ撥ばち一挺ちようなくつても口三味線で門  
附かけをしかねない凶々しい度胸なのが、すたすたもので、町も、  
村も、ただ人氣のない処と遁にげましたわ、知らぬ他国の奥州くん  
だり、東西も弁わえまない、心細い、睨な道みち。赤い月は、野末に一  
つ、あるけれど、もと末も分らない、雲を落ちた水のような畝うねつ

た道を、とぼついて、堪らなくなつて——辻堂へ、路傍みちばたの芒すすきを分けても、手に露もかかりません。いきれの強い残暑のみぎり。

まあ、のめり込んだ御堂の中に、月にぼやつと菅笠ほどの影が出来て、大きな梟ふくろう——また、あつちの森にも、こつちの林にも鳴いていました——その梟が、願はちまき巻まきをしたような、それですよ。

……祭つた怪しい、御本体は。——

この私だから度胸を据えて、禪ふんどしあかが紅あかでないばかり、おかめが背し負よつたように、のめつていますと、（姉さん一緒においで。——）

そういつて、堂のわきの茂りの中から、大方、在ざいかた方の枝道を伝つて出たと見えます。うす青い縞しまの浴衣ひとえだか単衣ひとえだか、へこ帯のちよい結びで、頬ほおかぶり被かぶりをしたのが、菅笠をね、被かぶりらずに、お前

さん、背中へ掛けて、小さな風呂敷包みはその下にあるらしい：  
…から脛すねの色の白いのが素足に草鞋わらじばきで、竹の杖を身軽についで、すつと出て来てき、お前さん。」

お妻は、踊の棒に手をかけたが、

「……実は、夜食をとりはぐつて、こつちも腹がすいて堪らない。堂にお供物の赤飯でもありはしないか、とそう思つて覗のぞいて、お前を見たんだ、女じや食われない、食いもしようが可哀相かわいそうだ、といつて笑うのが、まだ三十前、いいえ二十六七とも見える若い人。もう少し辛抱おしと、話しながら四五町、土橋を渡つて、榎えのきと柳で暗くなると、家うちがあります。その取と着つらしいのの表戸を、きしきし、その若い人がやるけれど、開きますまい、あきません。

その時さ、お前さんちよつと捜して、藁すべを一本見つけて。」

お妻は懐紙の坊さん（その言に従う）を一人、指につまんでいった。あと連は、掌の中に、こそこそ縮まる。

「それでね、あなた、そら、かなの、※形の、その字の上を、まゐるいように、ひよいと結んで、（お開け、お開け。）と言いますとね。」

信也氏はその顔を瞻つて、默然として聞いたというのである。

「——苦もなく開いたわ。お前さん、中は土間で、腰掛なんか、台があつて……」膳めし屋といふのが、腰障子の字にも見えるほど、黒い森を、柳すかしに、青く、くぐつて、月あかりが、水で一漉し漉したように映ります。

目も夜鳥ぐらい光ると見えて、すぐにね、あなた、井、小鉢、  
 お櫃ひつを抱えて、——軒下へ、棚から落したように並べて、ね、蚊  
 を払い（おお、飯はからだ。）（お菜漬はづけだけでも、）私もそこへ  
 取着きました。が、きざみ昆布こぶ、雁もどき、鱧にしん、焼豆腐……皆、ぷ  
 んとむれ臭い。（よし、よし、よし、大餛おおすえに餛おすえている。この温う  
 気んきだと、命仕事だ。）（あなたや……私はもう我慢が出来ない、  
 お酒はどう。）……ねえ、お前さん。——  
 （酒はいけない。ひもじ飢い時の飯粒は、天道もお目こぼし、姉さんが  
 改札口で見つからなかったも同じだが、酒となると恐多い……）  
 と素早いこと、さつさ、と片づけて、さ、もう一のし。

今度はね、大百姓……古い農家の玄関なし……土間の広い処へ

入りましたがね、若い人の、ぴったり戸口へ寄った工合で、鍵のかかっていることは分っています。こんな蒸暑さでも心得は心得で、縁も、戸口も、雨戸はぴったり閉っていました。そこは古い農家だけに、節穴だらけ、だから、覗くと、よく見えました。土間の向うの、おおき大い炉のまわりに女が三人、男が六人、ごろんごろん寝ているのが。

若い人が、鼻紙を、と云って、私のを——そこから拾って来た、いくらもあります、農家だから。——藁すべで、さつき前刻のような人形を九つ、お前さん、——そこで、その懐紙を、引裂いて、ちよつとくる包めた分が、白くなるから、妙に三人の女に見えるじやありませんか。

敷居際へ、——炉端のようなおなじかつこう恰好かっこうに、ごろんと順に寝かして、三度ばかり、上から掌てのひらうつむで俯向けなに撫なでたと思うと、もう楽なもの。

若い人が、ずかずか入って、寝ている人間の、裾すそだって枕まくらも

許とだって、構まやしません。大まかに搔か捜さして、御飯ごはん、お香かこう、

お茶の土瓶つちびんまで……目刺めさを串くしごと。旧の盆ぼん過ぎで、苧おがら殻がらがまだ沢

山あるのを、へし折をって、まあ、戸かどを開放かどびしのまま、敷居際、燃

しつけて焼かくんだもの、呆かどれました。（門火かどび、門火かどび。）なんのと、

呑のんき気きなもので、（酒さけだと爛かんだが、こいつは死し人びと焼やきだ。このしろ

でなくて仕合しあせ、お給仕たまをしようか。）……がつがつ私わが食くべる

うちに、若い女おんなが、一人、炉端ろたんで、うむと胸むねも裾すそもあけはだけ

起上りました。あなた、その時、火の誘った夜風で、白い小さな人形がむくりと立ったじゃありませんか。ぽんと若い人が、その人形をもろに倒すと、むこうで、ばったり、今度は、うつむけにまた寝ました。

驚きましたわ。藁を捻ひねったような人形でさえ、そんな業わざをするんだもの。……活きたものは、いざとなると、どんな事をしようも知れない、可おそろし恐いようね、ええ？……——もう行やつてる、寝ね込ごみの御飯をさらって死人焼で目刺を——だって、ほほほ、まあ、そうね……

いえね、それについて、お前さん——あなたの前だけでも、お友だちの奥さん、京千代さんは、半玉の時分、それはいけずの、いたずらでね、なかの妹（お民をいう）は、お人形をあつかえばつて、屏風びょうぶを立てて、友染の搔卷かいまきでおねんねさせたり、枕を二つならべたり、だっただけれど、京千代と来たら、玉乗りに凝つてるから、片端かたっぱしから、姉様あねさまも殿様も、紅あかい糸や、太白で、ちよつとかがつて、大小護謨毬ゴムまりにのツけて、ジャズ騒ぎさ、——今でいえば。

おかみ 主婦に大目玉をくつた事があるんだけど、弥生やよいは里の雛遊ひなあそび……は常磐津ときわづか何かのもんくだっけ。お雛様を飾つた時、……五人ごにん囃子ばやしを、毬たまごにくツつけて、ぽんぽんぽん、ころん、くるくる

なんだもの。

ところがね、真夜中さ。いいえ、二人はお座敷へ行っている：  
…こつちはお茶がちだから、お節句だというのに、三人のいつも  
の部屋で寝ました処、枕許が賑かだから、船底を傾けて見ますと  
ね、枕許を走ってる、長い黒髪の、白いきものが、球に乗って、  
……くるりと廻ったり、うしろへ反ったり、前へ<sup>すべ</sup>つたり、あら、  
大きな蝶が、いくつも、いくつも雪洞<sup>ほんぼり</sup>の火を<sup>くわ</sup>啣えて踊る、ちら  
ちら紅い袴<sup>はかま</sup>が、と吃驚<sup>びっくり</sup>すると、お囃子が雛壇で、目だの、鼓の  
手、笛の口が動くと思うと、ああ、遠い高い処、空の座敷で、イ  
ヤアと冴えて、太鼓の掛声、それが聞覚えた、京千代ちい<sup>ねえ</sup>姐。  
……ものの形をしたものは、こわいように、生きていますわね。

——やがてだわね、大きな樹の下の、なわて 暇から入口の、牛小屋だが、うまや 厩だかで、がたんがたん、騒しい音がしました。すつと立って若い人が、その方へ行きましたっけ。もう返った時は、ひつそり。芋おがら殻の燃もえさし、藁の人形を揃えて、くべて、逆縁ながらと、土瓶をしたんで、ざあ、ちゅうと皆消えると、夜あらしが、さっ颯と吹いて、月が真まっ暗くらになって、しんとする。(行きましよう、行きましよう。)ぞつと私は凄すごくなって、若い人の袖を引張ひっぱつて、見はるかしの田畝道へ。……ほつとして、

(聞かして下さいまし、どんなお方)。

(私か。)

(あなた。)

(森の祠の、こんせいみょうじん金勢明神。)

(……………)

(男の勢だ。)

(キヤア。)

話に聞いた振袖ふりそでしんぞ新造が——台のものあらしと行って、大びけ過ぎに女郎屋の廊下へ出ましたと——狸に抱かれたような声を出して、夢中で小一町駆出しましたが、振向いても、立って待っても、影も形も見えません、もう朝もやが白んで来ました。

それなの、あなた、ただいま行いました、小さなこの人形たちは。

たなそこ  
掌にんずにのせた紙入形じつを凝じつとためて、

「人数にんずが足りないかしら、もつとも九ツ坊さんと来りやあ、恋も呪のろいもしますからね。」

で、口を手つだわせて、手さきで扱しごいて、懐ふところ紙がみを、蚕かいこを引出すように数を殖ふやすと、九つのあたまが揃ふつて、黒い扉の鍵穴へ、手足がもじや、もじや、と動く。……信也氏は脇の下をすくめて、身ぶるいした。

「だ……」

がっかりして、

「めね……ちよつと……お待ちなさいよ。」

信也氏が口をきく間もなく、

「私じゃ術がきかないんだよ。こんな時だ。」

何をする。

風呂敷を解いた。見ると、絵筒である。お妻が蓋ふたを抜きながら、

「雪おんなさん。」

「……………」

「あなたがいい、おばけだから、出入りは自由だわ。」

すると早や絹地を、たちまち、水晶の五輪塔を、月影の梨の花が包んだような、扉に白く絵の姿を半ば映した。

「そりゃ、いけなかるう、お妻さん。」

鶴の作品の扱い方をとがめたのではない、お妻の迷まよをいたわつて、悟そうとしたのである。

「いいえ、浅草の絵馬の馬も、草を食べたというじやありませんか。お京さんの旦那だから、身鼻<sup>みびいき</sup>屑<sup>くず</sup>をするんじゃないけれど、あれだけ有名な方の絵が、このくらいな事が出来なくっちゃ。」

絵絹に、その面影が朦朧<sup>もうろう</sup>と映ると見る間に、押した扉が、ツトおのずから、はずみにお妻の形を吸った。

「ああ、吃驚<sup>びっくり</sup>、でもよかった。」

と、室<sup>へや</sup>の中から、

「そら、御覧なさい、さあ、あなたも。」

どうも、あけ方が約束に背いたので、はじめから、鍵はかかっていかなかったらしい。ただ信也氏が手を掛けて試みなかったのは、他に責<sup>せめ</sup>を転じたのではない。空室<sup>あきま</sup>らしい事は分っていたから。し

かし、その、あえてする事をためらったのは、卑怯ひきようともいえ、消極的な道徳、いや礼儀であつた。

つい信也氏も誘われた。

する事も、いう事も、かりそめながら、懐紙の九ツの坊さんで、力およばず、うつくしいばけものの、雪おんな、雪女郎の、……手も袖もまだ見ない、膚はだであいた室へやである。

ひとま  
一室——ここへ入つてからの第二の……第三の妖ようは………

………

昭和八（一九三三）年七月





# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成9」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年6月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日発行

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年3月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 開扉一妖帖

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>